

神戸市

# 堂垣内遺跡・小坂遺跡

新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



平成 26(2014)年 3月

兵庫県教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、神戸市北区有野町に所在する、堂垣内遺跡・小坂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、西日本高速道路（株）関西支社兵庫工事事務所（平成24年6月より新名神兵庫事務所）が進める新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴うものである。同事務所の依頼に基づき、兵庫県立考古博物館が堂垣内遺跡は平成21年度に、小坂遺跡は平成23年度にそれぞれ本発掘調査を実施した。
3. 遺構実測は、調査員と調査補助員が行った。遺構の清図および遺物の実測・清図は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター嘱託員が行った。
4. 写真は、遺構を調査員が担当し、遺物については（株）クレアチオに委託した。
5. 火葬址出土の炭化材について、放射性炭素年代（AMS測定）を（株）加速器分析研究所に依頼した。
6. 本書の本文挿図1「周辺の遺跡」は兵庫県教育委員会発行の兵庫県遺跡地図1/35,000を1/25,000に拡大し、一部に加筆した。また、同じく図版1「遺跡の位置」は、西日本高速道路（株）関西支社兵庫工事事務所提供の1/2,000都市計画図を縮小して使用した。
7. 本書で使用した標高は東京湾平均海水準(TP)を基とし、方位は国土座標V系の座標北を指す。
8. 本書の編集・執筆は、池田悦子の補助を得て、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 西口・山上・長浜が行った。
9. 調査で出土した遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に、作成した写真・図版等の資料は兵庫県立考古博物館（兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号）において保管している。
10. なお、発掘調査および報告書の作成にあたっては、神戸市教育委員会から資料提供・御指導等をいただいた。記して感謝の意を表すものである。

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに .....	(1)
第Ⅱ章 堂垣内遺跡の調査 .....	(3)
第Ⅲ章 小坂遺跡の調査 .....	(8)

## 表 目 次

表1 遺物観察表 .....	(6)
表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値) .....	(6)
表3 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、曆年較正用14C年代、較正年代) .....	(7)

## 本文挿図

第1図 小坂遺跡出土遺物 .....	(9)
--------------------	-----

## 図版目次

図版1 調査地点位置図	図版7 堂垣内遺跡 遺構III
図版2 堂垣内遺跡 遺構全体図	図版8 堂垣内遺跡 遺構IV
図版3 堂垣内遺跡 遺構平面図詳細図	図版9 堂垣内遺跡 遺構V
図版4 堂垣内遺跡 トレンチ1・2土層断面図	図版10 堂垣内遺跡 出土遺物
図版5 堂垣内遺跡 遺構 I	図版11 小坂遺跡 遺構全体図
図版6 堂垣内遺跡 遺構 II	図版12 小坂遺跡 遺構平・断面図

## 写真図版目次

写真図版1 国土地理院航空写真	写真図版8 堂垣内遺跡 遺構II
写真図版2 堂垣内遺跡 空中写真I	写真図版9 堂垣内遺跡 遺構III
写真図版3 堂垣内遺跡 空中写真II	写真図版10 堂垣内遺跡 遺構IV
写真図版4 堂垣内遺跡 空中写真III	写真図版11 堂垣内遺跡 遺物
写真図版5 堂垣内遺跡 確認調査	写真図版12 小坂遺跡 確認調査
写真図版6 堂垣内遺跡 本発掘調査全景	写真図版13 小坂遺跡 本発掘調査
写真図版7 堂垣内遺跡 遺構I	写真図版14 小坂遺跡 遺構・遺物

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

今回報告する2遺跡は、新名神高速道路建設（旧称 第二名神高速道路建設）箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴い調査を実施した。

堂塙内遺跡は、兵庫県土木部建設課より依頼を受け、平成10年度に神戸市北区神戸市JCT（仮称）～川西市の区间について兵庫県教育委員会が分布調査を行い、遺物の散布を認め、No20地点とした。

この分布調査結果を受け、平成20年度に西日本高速道路（株）関西支社兵庫工事事務所からの依頼により確認調査を行った。埋蔵文化財が包蔵されることが明らかとなり、堂塙内遺跡とした。

更に、この確認調査結果を受け、平成21年4月8日付 関兵工第33号により本発掘調査を実施した。

本発掘調査は当初、平成21年5月より開始予定であったが、地元との協議を行い、平成21年10月15日より開始した。

一方、小坂遺跡は、平成7年度に神戸市教育委員会が実施した確認調査によって、古墳（大橋山古墳群）・城跡（小坂砦）・中世～近世墳墓跡などが確認され、小坂遺跡として周知されている地点である（015739）。

この内、今回の施工対象範囲内では、古墳時代後期の方墳1基（大橋山古墳群7号墳）、小坂砦に伴うものと考えられる平坦面、須恵器・土器器片などが確認されている。

上記の結果を受け、平成23年6月3日付け関兵工第304号によって確認調査を実施する運びとなった。

調査の結果、大橋山古墳群7号墳・小坂砦が存在する平坦面及び斜面にのみ遺構が存在すると判断され、本発掘調査を実施することとした。

## 第2節 各調査の経過と整理作業

### 〔分布調査〕

遺跡調査番号 980063

所在地 神戸市北区・宝塚市・川西市・川辺郡猪名川町

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第2班 池田正男 吉識雅仁 西口圭介 池田征弘  
松野健児 佐々木俊彦 戸田真美子

調査期間 平成10年5月6日～5月13日

調査面積 約130万m<sup>2</sup>

概要 平成10年5月6日～5月13日に対象路線内、施工対象範囲約130万m<sup>2</sup>について分布調査を行い、埋蔵文化財が包蔵される可能性が高い地点の一つとしてNo20地点が挙げられた。

### 〔確認調査〕

堂塙内遺跡（新名神No20地点）

遺跡調査番号 2008178

所在地 神戸市北区有野町二郎字堂塙内

調査主体 兵庫県教育委員会  
調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第2班 西口圭介・長濱誠司  
調査期間 平成21年1月6日～平成21年3月18日  
調査面積 572m<sup>2</sup>

#### 小坂遺跡

遺跡調査番号 2011233  
所在地 神戸市北区有野町二郎  
調査主体 兵庫県教育委員会  
調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第2班 西口圭介  
調査期間 平成23年8月1日～平成23年8月3日  
調査面積 40m<sup>2</sup>

#### 〔本発掘認調査〕

##### 堂垣内遺跡

遺跡調査番号 2009150  
所在地 神戸市北区有野町二郎字堂垣内  
事業者名 西日本高速道路（株）関西支社兵庫工事事務所  
事業名 新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事  
担当者 西口圭介・長濱誠司  
期間 平成21年10月15日～平成21年12月22日  
面積 853m<sup>2</sup>

##### 小坂遺跡

遺跡調査番号 2011262  
所在地 神戸市北区有野町二郎  
事業者名 西日本高速道路（株）関西支社兵庫工事事務所  
事業名 新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事  
担当者 山上雅弘・長濱誠司  
期間 平成23年10月18日～平成23年11月29日  
面積 482m<sup>2</sup>

#### 〔整理作業〕

出土遺物の整理については、平成21年（本発掘調査時）に遺物洗浄を実施した以外すべて平成25年度に実施した。  
調査担当者 西口圭介・山上雅弘  
整理保存課 長濱誠司・深江英恵  
実測・製図・レイアウト 古谷章子・池田悦子・佐伯純子

## 第Ⅱ章 堂垣内遺跡の調査

### 第1節 確認調査の成果

3本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。何れも上部の盛り土・表土については機械力によって排除し、遺構面上の遺物包含層については人力による掘削を施し、遺構検出・精査を行った。また、1・2トレンチについては、盛り土の厚さが2m以上に及ぶことから、安全面に配慮し、適宜、トレンチ幅を広げ、勾配・小段を設けた。また、調査区内に滞留した雨水については沈砂池を介し、西側の池へ排水した。

各トレンチは調査終了後、検出した遺構の保護を行った後、一旦埋め戻しを行った。

1トレンチ・2トレンチは、昭和30年代以降の造成が数度行われ、ほとんど旧地形は残っていない。階段状に削平されているため、損壊を免れたのは傾斜の下方側の一部であり、その部分に旧表土・堆積土が遺存している。

#### 各トレンチの概要（図版1・4 写真図版5）

**1トレンチ** 全長45m・上面での幅約7mを基本とするトレンチを設定した。平均2.5mの盛り土下より、地山面が出現しており、トレンチ北半部分の一部に旧地表が残存している部分がある。

調査の結果、トレンチ北半部より焼土坑1基、北端より集石土坑1基を検出した。

焼土坑は長軸1.0m・短軸0.4m以上を測る楕円形の土坑である。土坑の壁は火化が顕著であり、赤朱色を呈している。焼土坑からは火葬人骨片が出土している。

遺物は土師器細片数点が出土しているが、時期を特定できるものではない。

**2トレンチ** 全長39m・幅7mを基本とするトレンチを設定した。平均2.5mの盛り土下より、地山面が出現しており、トレンチ北半部分の一部に旧地表が残存している部分がある。

調査の結果、トレンチ北端より焼土坑1基を検出した。また、土坑の検出を受け、断面を精査したところ、土坑底に堆積したと考えられる炭層を1か所確認した。

焼土坑は長軸95cm・短軸62cmを測る楕円形の土坑である。土坑底に3列の石列を並べ、土坑内には炭が充満している。土坑内は被熱している。形状・被熱状態から推して火葬施設であったと考えられる。

遺物は須恵器細片のほか、壁面より鉄製品1点、盛土中より土師器1点が出土した。

**3トレンチ** 全長40m・幅2mのトレンチを設定した。若干の盛土・現表土下からは地山が出現しており、昭和30年代以降の造成によって尾根上及び斜面が削平されていることが明らかである。全体の掘削深度は約40cmである。部分的に旧地形の谷部の凹みが残っており、銭貨1点、弥生土器底部が出土したが、遺構・包含層を認めるものではなかった。

調査の結果、焼土坑2基を中心とした遺構を検出した。これらの遺構は調査地点の北半を占める旧畠1枚分に集中しており、標高の高位を占める地点からは検出されていない。これは昭和期の造成が甚だしく、遺構面がすべて削平されているためと考えられる。

検出した遺構は主に焼土坑で構成されており、北摂津では、有鼻遺跡や北神ニュータウン建設に伴い調査された中世後期の火葬墓群に酷似している。遺物からの時期決定は行えないが、同様の火葬遺構を検出したものと判断した。

調査地点西側の池は從来、調査地点北側にある1528年開基の伝承をもつ布袋寺の所有と伝えられ、寺内の墓地には16世紀代の墓石が多数存在することから、当地点との関わりも推定でき、16世紀代の墓地が存在する可能性が指摘された。

## 第2節 本発掘調査の成果

### 1. 遺跡の概要

調査対象地は、北へ延びる小規模な尾根の北向き斜面に位置しており、過去に2～3段の水田・イチゴハウスに造成されている。当初の地形は斜面中央に幅10mほどの谷筋が刻まれており多量の転石が流れ込んだ状態であった。確認調査において検出されていた中世後期の火葬址は、この谷筋の肩に沿って検出されており、ある程度谷筋が埋没した時点で構築されている。検出された遺構は、焼土坑4基、土坑・不定形の落ち込み30基、溝2条を検出した。

出土遺物は、中世後期の石造品1点・鉄釘2点・火葬人骨が出土している。この他、谷筋を中心に弥生時代中期の土器・石槍片・サヌカイト調片が出土している。尾根上には当該時期の遺跡が存在する可能性が高い。

### 2. 層序（図版1・4 写真図版5）

調査区の大半は造成により旧耕作土下から地山面が出現する。部分的に旧耕作土下に明褐色土が堆積し、更に下層には土壤層（褐灰色シルト）が残存する。遺構は土壤層直下、埋没した谷部上面より検出されている。

### 3. 遺構

#### 火葬址群（図版1・4 写真図版5・7・8）

赤色の火熱面と炭化物を伴う土坑を4基検出した。焼骨を伴い、その形態から火葬址と判断した。

**SX01** 調査区中央に位置する。長軸0.93m・短軸0.63m・深さ約13cmの俵形の土坑である。長さ20cm程度の6個の台石が2列に並ぶ。石の表面・裏面ともに被熱しており、更に石の下面に更に被熱面が存在することから少なくとも3回の火葬が行われたことが確認できる。また、炭化物上面には棺の底板材の圧痕が見受けられた。焼骨は殆ど出土していない。

**SX03** 調査区南西隅に位置する。長軸1.2m・短軸0.7m・深さ約20cmの楕円形の土坑である。中央に集石があり、人骨が散在する。石材の表面・裏面ともに被熱しており土坑底より浮く。2度以上の火葬が推測される。

**SX04** SX01の西隣に位置する。長軸1.16m・短軸0.8m・深さ約28cmの楕円形の土坑である。8個の台石が花弁様に並び、花芯にある石はやや大きいく高い。石の表面・裏面ともに被熱しており、更に石の下面に更に被熱面が存在することから少なくとも3回の火葬が行われたことが確認できる。また、形状から、台石を使用して火葬した棺は円形であった可能性が高く、早桶であったと考えられる。焼骨は殆ど出土していない。上部の標石状の石は、納骨石組の一部であった可能性も残る。

**SX05** 調査区南東隅に位置する。大半は削平され、長軸0.8m・短軸0.35m以上・深さ約15cmの方形の土坑と考えられる。土坑内より鉄釘・炭化物・焼骨が出土している。円形土坑SX36と切り合い、新しい。

#### 土坑群（図版3・7～9 真図版9・10）

火熱面と炭化物を伴わない土坑を19基検出した。何れも遺物を伴わず、樹木痕や谷部が堆積する過程で生じた凹凸が含まれるものと考えられる。その大半は全長1m程度の不整な楕円形を呈する。

**SX14** ほぼ中央部に位置する。長軸1.6m・短軸0.7m以上の隅丸方形の土坑内に、長軸0.9m・短軸0.7m・深さ約10cmの楕円形の土坑と一辺0.5m・深さ約10cmの隅丸方形の土坑の2基が並ぶ。また、上部に径20cm前後の集石がある。

**SX15** SX14に隣接する。長辺0.85m・短辺0.7m以上・深さ約15cmの隅丸方形の土坑内に、径15cm前後の集石がある。

**SX06** ほぼ中央部に位置する。長辺0.85m・短辺0.8m以上・深さ約10cmの隅丸方形の土坑内に、径60cm前後の土坑が取りつく。共に径15cm前後の集石がある。円形土坑内に炭化物が存在するが、樹木株と考えられる。

**SX08** ほぼ中央部に位置する。長辺1m・短辺0.8m以上・深さ約20cmの隅丸方形の土坑である。断面は舟底状である。

**SX12** ほぼ中央に位置する。長辺1m・短辺0.66m・深さ約10cmの不整楕円形の土坑で、SX13と切り合い、新しい。底面は平坦である。土坑底に4個の石が棺台状に配されている。

**SX13** SX12と切り合い古い。長径1.4m、短径0.9m・深さ約10cmの楕円形土坑である。底面は平坦である。

**SX17** SX04の西隣に位置する。長径1m、短径0.65m、深さ28cmを測る。底面は尖った舟底形である。

**SX19** SX06の東隣に位置する。不整長楕円形の土坑で、長径1.5m、短径7.2m、深さは15cmを測る。

断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。土坑内のピットの性格は不明である。

**SX22** 中央部南寄りに位置する。径約60cm・深さは25cmを測る円形の土坑である。断面形は箱形を呈し、底面は中央がやや窪む。上面に集石が存在する。

**SX23** SX22の南隣に位置する。不整長楕円形の土坑で、長径1.5m、短径0.8m、深さは28cmを測る。

断面形はU形を呈し、底面は丸い。土坑内には径5cm前後の石が散らばるが性格は不明である。

**SX25** 中央西よりに位置し、SX26と並ぶ。不整楕円形の土坑で、長径1.3m、短径0.6m、深さは6cmと浅く、底面は浅い皿形である。南端を中心に集石がある。

**SX26** 中央西よりに位置し、SX25と並ぶ。不整な洋梨形の土坑で、長径1.3m、短径0.7m、深さは10cmと浅く、底面は浅い皿形である。土坑底にまばらに石が入る。

**SX27** 中央西よりに位置し、SX26の更に西側に位置する。不整な空豆形の土坑で、長径1.15m、最大短径0.8m、深さは10cmと浅く、底面は浅い皿形である。土坑底を中心に集石がある。

**SX30** 調査区南西端に位置する。SX32の北隣に位置する。不整長楕円形の土坑で、長径1.15m、短径0.7m、深さは20cmを測る。断面形は舟底形を呈する。内側に浅い段落ちがあり、形状から土坑墓であった可能性も考えられる。

**SX31** 調査区南西端に位置する。SX32の東隣に位置する。不整長楕円形の土坑で、長径1.16m、短径0.7m、深さは25cmを測る。断面形は逆台形を呈する。内側に浅い落ちがあり、形状から土坑墓であった可能性も考えられる。

**SX32** 調査区南西端に位置する。SX03の東隣に位置する。長径1.5m、短径は中央付近で0.95m、深さ16cmである。点多福形の形状から樹木の根痕跡と考えられる。

**SX33** 調査区南西端に位置する。SX03の南側に位置する。長径1m、短径0.6m・深さ約22cmの卵形の土坑である。断面は舟底形を呈する。

**SK35** 調査区東端に位置する。SD01と切り合い新しい。不整な隅丸方形の土坑で、長径0.98m、短径0.78m、深さは18cm、底面は浅い皿状である。南端に石が入る。

溝 (図版2・9 写真図版10)

**SD01** 調査区東端に位置する。SK35と切り合い古い。全長8.60m、最大幅1.1mを測る。検出面からの最大深は12cmと浅い。底面は浅いV字形である。

炭化物 (図版2 写真図版10)

下段には顕著な構造はなく、長軸4m、短軸2mの楕円形に炭化物の広がりを認めた。焼骨・火化面は認められない。

#### 4. 遺物 (図版14 写真図版11)

**土器** 土器は全て弥生土器である。大半は谷部より出土している。1～7は壺の口縁部である。何れも磨滅が激しく、内外面の調整は不明である。何れも外側へ水平に拡張し、口縁端部は撥形に肥厚し、端部外面に面をもつ。口縁部の拡張は、1・5・6が頸部からアールを描いて屈曲し、2・3・4・7は屈曲を見せている。8～12は底部である。8は壺底部である。平底から大きく外方へ開く体部をもつ。2次焼成を受け、内外面の調整は不明である。9は壺もしくは甌の底部である。平底から外方へ立ち上がる体部をもつ。外面底部近くに刷毛調整が残る。10は底径12.2cmを測る大型の壺もしくは甌の底部である。平底から外方へ立ち上がる体部をもつ。内外面に指サエ痕が認められる。全体に2次焼成を受け、内外面の調整は不明である。11は底部外面が窪み、やや薄い。外方へ開く体部をもつ。2次焼成を受け、内外面の調整は不明である。12は平底から丸みを帯びて立ち上がる体部をもつ。外面に一部指サ

エ痕が認められる他は、磨滅のため内外面の調整は不明である。13は杯部の大半を欠く、高杯である。残存する杯部はワイングラス状に丸みを帯びる。脚部は下半が大きく外方に開き端部に面をもつ。調整は磨滅が激しく詳らかではないが、脚部下半に縱方向のミガキ、脚部端は横ナデを施す。

**石器・石造品** S1はサヌカイト製の石槍である。先端を欠失している。基部に抉りを施す。S2はサヌカイト剥片である。S3は五輪塔地輪である。中央に水輪を据えた痕跡があり、下半は埋め込みのため打ち欠きが顕著である。

**金属製品** M1は寛永通宝である。M2はSX36より出土した鉄釘（頭巻釘）である。断面形状は長方形を呈している。M3は手斧である。片刃、袋状の柄の差し込み部がある。

表1 出土遺物観察表

報告番号	種別	器種	法量(cm)				地区	出土遺構	層位	備考
			口径	器高	底径	重量				
1	弥生土器	壺口縁部	(13.6)	(23)	-	-	上段北東端		淡海色土	
2	弥生土器	壺口縁部	(13.9)	(27)	-	-	上段	SX24		
3	弥生土器	壺口縁部	(15.5)	(21)	-	-	上段北半	谷部	濁灰極細紗(主)	
4	弥生土器	壺口縁部	(15.7)	(2.95)	-	-	上段北半	谷部	濁灰極細紗(主)	
5	弥生土器	壺口縁部	(15.8)	(1.25)	-	-	上段北半	谷部	濁灰極細紗(主)	
6	弥生土器	壺口縁部	(19.5)	(29)	-	-	上段北半	谷部	濁灰極細紗(主)	
7	弥生土器	壺口縁部	(23.3)	(13)	-	-	下段中央			ベースまで
8	弥生土器	底部	-	(43)	7.5	-	上段北半	谷部	濁灰極細紗(主)	
9	弥生土器	底部	-	(65)	(10.5)	-				
10	弥生土器	底部	-	(6.25)	(12.2)	-	上段	灰色シルト直まで	黄灰色混雜土	2次焼成うける
11	弥生土器	底部	-	(3.6)	5.3	-	3Hレンチ	SX034	変色部	確認調査時
12	弥生土器	底部	-	(3.5)	(8.6)	-	上段北半	谷部	濁灰極細紗(主)	
13	弥生土器	高杯	-	(8.25+3.65)	(13.8)	-	上段北半	谷部	濁灰極細紗(主)	
14	須恵器	壺 翼部	-	(1.55)	-	-				小坂遺跡 人力掘削
15	須恵器	壺?	-	(2.4)	-	-				小坂遺跡 人力掘削
S1	石器	石槍	長さ(5.5)	幅2.35	厚み1.2	15.1g	北端	側溝内	旧地表中	
S2	石器	加工痕がある剥片	4.3	2.8	0.8	8.5g	上段中央付近		灰色土上	
S3	石造品	五輪塔の地輪	22.35	器高19.0	-	-	上段	谷部	洪水平野層中	機械掘削時
M1	銅製品	銭(寛永通宝)	径2.1	-	-	-	3Hレンチ	中央変色		確認調査時
M2	銅製品	頭巻釘	長さ(1.5)	頭0.8 周0.45	厚み0.25	-		SX36 上段		
M3	鉄製品	手斧	長さ(6.95)	幅4.45	厚み1.55	-	2Hレンチ北端			確認調査時

## 5. 自然科学による調査成果

遺構の時期を決定できる遺物が出土していないため、火葬址出土の炭化材について、放射性炭素年代(AMS測定)を(株)加速器分析研究所に依頼した。測定に使用した資料1はSX01、資料2はSX04下半埋土から出土した。火葬に使用された薪が炭化したものである。試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。結果、火葬址埋土から出土した試料2点の14C年代は、誤差( $\pm 1\sigma$ )の範囲で一致しないが、かなり近い値となっている暦年較正年代( $1\sigma$ )は、HY-11が1327~1415cal AD、HY-12が1295~1388cal ADの間に各々2つの範囲で示される。

表2 放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C} (\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-131135	HY-11	火葬址 SX01 埋土	木炭	AAA	-24.79 $\pm$ 0.64	560 $\pm$ 20	93.30 $\pm$ 0.28	
IAAA-131136	HY-12	火葬址 SX04 下半埋土	木炭	AAA	-27.11 $\pm$ 0.56	640 $\pm$ 20	92.36 $\pm$ 0.29	

表3 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、曆年較正用 14C 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-131135	550 ± 20	93.34 ± 0.25	556 ± 23	1327calAD - 1343calAD (27.1%) 1395calAD - 1415calAD (41.1%)	1316calAD - 1355calAD (42.9%) 1388calAD - 1426calAD (52.5%)
IAAA-131136	670 ± 20	91.96 ± 0.27	638 ± 24	1295calAD - 1313calAD (25.3%) 1358calAD - 1388calAD (42.9%)	1285calAD - 1327calAD (39.6%) 1343calAD - 1395calAD (50.8%)

### 第3節　まとめ

調査区内に少なくとも4基の火葬施設が存在したことが判明した。これらの火葬施設の特徴として、以下の点があげられる。①非常に小規模である。②SX03を除き、丁寧に掃除を行い、繰り返し使用している。③火葬施設に台石が据え付けられているものと、台石が存在しないものがある。④楕円形の土坑の中に死者を焼くための円形の台石が据えられており、その形状から棺桶（早桶）を火葬に使用していたと判断できる例SX04がある。⑤SX04以外の火葬施設についても殆ど棺釘が出土せず、小規模な長方形棺や壺、早桶あるいは棺を使用しないまま火葬を行っていた可能性がある。⑥骨器や納骨施設が確認されていない。6点である。以上の点から、火葬施設は各々複数回使用され、且つ火葬骨埋納施設（火葬墓）としては機能していない火葬址群と理解できる。また、SX04の状況から、座棺が使用されていたことが分かる。そして、火葬址は放射性炭素年代（AMS測定）の結果から概ね1300年代から1400年代初めの間に使用された可能性が高い。放射性炭素年代以外の根拠はないが、堂塙内遺跡の火葬址群の時期を14世紀末から15世紀前半と見ておきたい。

近畿地区の中世墓地を概観した場合、13世紀から14世紀前半には土葬墓地・火葬墓地ともに営まれるが、14世紀後半以降、概ね火葬墓地へと収斂されてゆく。15世紀初頭後は近畿一円に火葬墓が盛行する時期にあたり、小規模ながら、本遺跡においても火葬施設が営まれたものと考えられる。

本遺跡の火葬址の特徴は、小規模な火葬施設を複数回使用していることがある。北摂地区における14世紀後半から15世紀前半の火葬址の多くはその上部に火葬骨を埋納する茶毬墓であることが多く、1回で使用を終える。また、火葬施設は15世紀代以降大型化し共同火葬場を営む例も見受けられる。堂塙内遺跡例はそのどちらでもなく、複数回使用する小型の火葬施設が複数基並んでゆく。火葬址は散漫に分布しており、同時期に複数基が稼働していたことも想定される。これらの火葬址の性格付けは難しいが、「家」ごとの火葬址と考えることは出来ないであろうか。

また、本遺跡は14世紀末から15世紀前半において座棺を火葬に使用していたことを示す興味深い例と評価できる。座棺の使用は禅宗の影響を受け14世紀代に出現するとの指摘が文献史学からある。土葬墓の調査例は見受けられるが、火葬において確定できる例は珍しく、北摂の小規模な火葬にまで座棺が採用されている点は、14世紀代末から15世紀初頭には近畿地区に広く座棺の使用が広がっていた可能性を考えさせる。また、座棺に使用された桶の生産についても興味深い資料である。

本遺跡では納骨施設については確認できていない。別地点に営まれた墓地、あるいは周辺の寺院墓地に納骨されたと考えられる。調査時には近接する布袋寺もしくは布袋寺に伴う墓地に納骨された可能性を考えたが、放射性炭素年代（AMS測定）の結果からは、伝えられる布袋寺の開基年代よりも火葬址は100年ほど古く、更に検討する必要がある。

なお、今回、火葬址と共に35基以上の楕円形土坑が検出されている。これらは、概ね火葬址に近似した規模を示しており、土葬墓等の遺構である可能性も排除できないが、遺物・骨片等の出土がなく、転石を含むものも多い。樹木痕や谷底に形成された凹凸などを含む可能性も高い。今後の検討課題としておきたい。

## 第Ⅲ章 小坂遺跡の調査

### 第1節 確認調査の成果

当該地において新名神高速道路 箕面～神戸間（兵庫県域）建設事業に伴う工事計画が提示された。当該地が位置する尾根では、平成7年度に神戸市教育委員会が実施した確認調査によって、古墳（大橋山古墳群）・城跡（小坂砦）・中世～近世墳墓跡などが確認され、小坂遺跡として周知されている（015739）。

この内、今回の施工対象範囲内では、古墳時代後期の方墳1基（大橋山古墳群7号墳）、小坂砦に伴うものと考えられる平坦面・須恵器・土師器片などが確認されている。

上記の結果を受け、平成23年6月3日付け関兵工第304号によって確認調査を実施する運びとなった。

調査対象地点は、南北に延びる尾根にあたり、尾根上及び東西斜面が含まれる。

今回の確認調査では、既に古墳の存在が明らかとなっている尾根上平坦面へはトレンチを設定せず、平坦面下の斜面にトレンチを設定した。

#### 各トレンチの概要（国版1 写真図版12）

トレンチを東側の緩斜面に2本（T1・T2）、西側の緩斜面に1本（T3）設定した。

##### 試掘トレンチ1（T1） 幅1.0m・全長10.0mのトレンチを北向き斜面に沿って設定した。

土下に薄い土壤（濁黄灰色土～濁茶灰色土）を挟み、北向きに傾斜する地山（黄灰色～青灰色土）面が出現した。地山の出現深度は現地表から0.2m～0.3mである。

遺構・遺物は検出されず、自然地形の傾斜が確認された。

##### 試掘トレンチ2（T2） 幅1.0m・全長15.0mのトレンチを北向き斜面に直交する東西方向に設定した。トレンチの東半部では疊を含む厚い堆積土が検出されており、土砂崩れに起因する可能性が高い。西半部では表土直下に薄い土壤（濁黄灰色土～濁茶灰色土）を挟み地山（黄灰色～青灰色土）が出現した。地山の出現深度は現地表から0.2m～0.5mである。

遺構・遺物は検出されず、自然地形の傾斜が確認された。

##### 試掘トレンチ3（T3） 幅1.0m・全長15.0mのトレンチを北向きの斜面に沿って、南北方向に設定した。地形は、トレンチの北半に傾斜の変換点があり、南半では急傾斜、北半では緩傾斜の地形である。

表土直下に薄い土壤（濁黄灰色土～濁茶灰色土）を挟み地山（灰白色土）が出現した。地山の出現深度は現地表から0.2m～0.3mである。

本トレンチからは、須恵器壺片が出土した。上部より転落してきたものと考えられる。

以上の結果、各トレンチからは遺構は検出されなかった。遺物は、T3より須恵器壺片が出土した。時期は平安後期から鎌倉時代の可能性が考えられる。

調査の結果、トレンチを設定した各斜面には遺構が存在しないことが確認できた。このことから本発掘調査は尾根上平坦面に限られることが判明した。

## 第2節 本発掘調査の成果

### 1. 遺跡の概要（図版1・12 写真図版13）

小坂遺跡の調査値周辺では平成7年に神戸市教育委員会が確認調査を実施したが、この結果、調査地周辺に古墳が存在する可能性が指摘された。このため、今回当該の地点について本発掘調査を実施した。

調査対象地は南北方向にのびる標高207mの尾根頂部から東西斜面にかけてである。ただし、対象地の南側は山陽自動車道建設により大規模に掘削されている。

尾根頂部はほぼ平坦でこの周辺から土坑・溝などの遺構が検出された。ただし、地形観察では古墳状の隆起などは確認できない。

### 2. 遺構（図版12・13、写真図版13）

検出した遺構には土坑5基、溝3本がある。これらの遺構はすべて尾根頂部で検出された。以下、各遺構について詳述する。

SK01 尾根頂部の東側で検出された土坑である。長さ1.9m、幅0.69m、深さ0.16mの規模を測る。

SK02 尾根頂部の東端で検出された土坑でSK02の隣に検出された。規模は隅円の長方形を呈する、規模は長さ2.8m、幅1.0m、深さ0.09mを測る。

SK03 尾根頂部の東端で検出された土坑である。隅円の長方形を呈する、規模は長さ2.1m、幅1.32m、深さ0.1mを測る。

SD01 土坑と同じく尾根頂部で検出された溝である。SK02・04の西隣に検出された溝で、東側で2股に分岐する。規模は最大長さ3.5mで溝の幅は0.3~0.6mである。

SD02 丘陵頂部の西側で検出された溝で、東から西に向かって傾斜する。規模は長さ3.6m、幅0.5~0.9m、深さ0.35mである。

SD03 丘陵頂部の西端、SD02の北側に検出された溝で、南北方向に検出された。北側は調査区の外側に延びる。検出範囲での規模は長さ2.7m、幅0.4~0.75m、深さ0.6mを測る。

### 3. 遺物（第1図・写真図版13）

出土した遺物は2点で、いずれも表土からの出土で遺構に帰属するものではない。

14は須恵器壺の頭部片である。おそらく直立して立ち上がる頭部を持つ直行壺と考えられる。

15は須恵器杯の底部片である。底部外面を回転ケズリ調整するがやや省略ぎみである。いずれも古墳時代後期のものと考えられる。

なお、法量等については堂垣内遺跡 表1 出土遺物観察表に併記した。

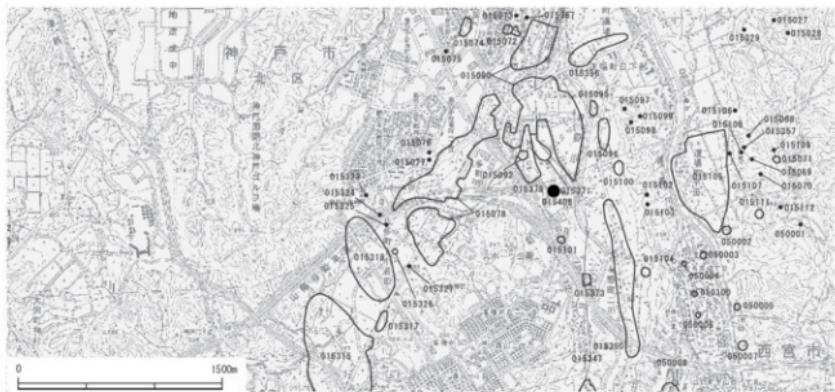
### 4.まとめ

調査区中央の尾根頂部で土坑・溝などの遺構を検出した。一方で古墳時代後期の遺物が出土した事実は周辺に古墳が存在した可能性を窺わせる。ただし、今回の調査地点ではこの痕跡を確認することが出来なかった。このため今後周辺地域の調査には留意が必要であろう。



第1図 小坂遺跡出土遺物





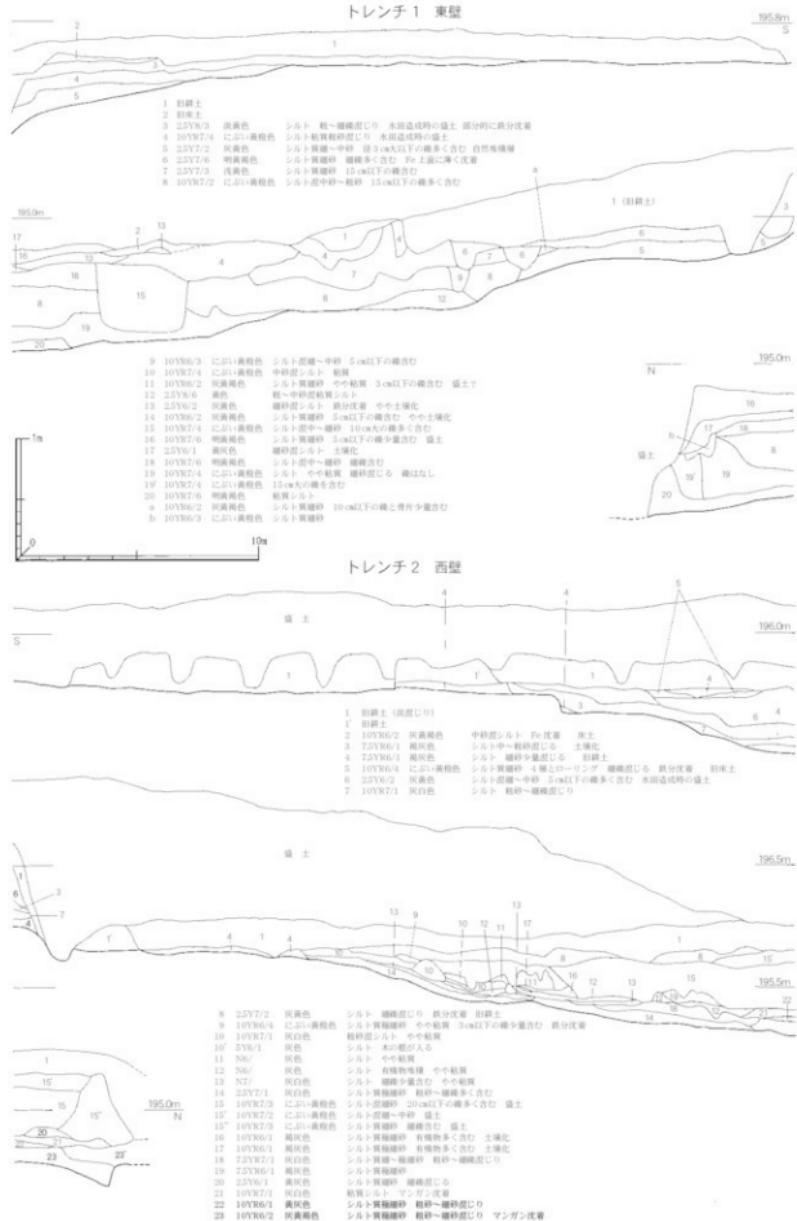
調査地点位置図



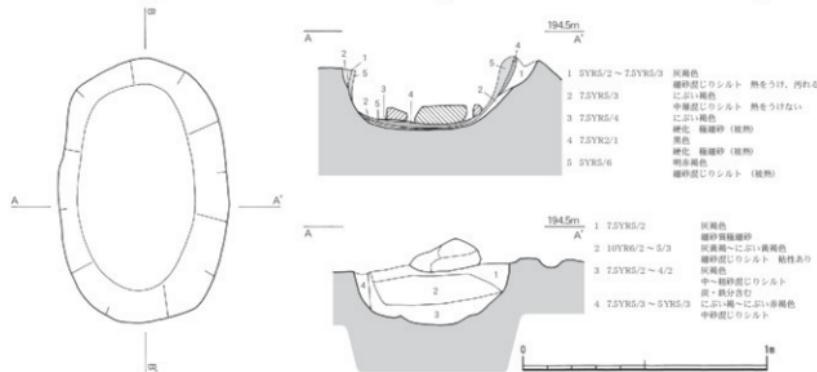
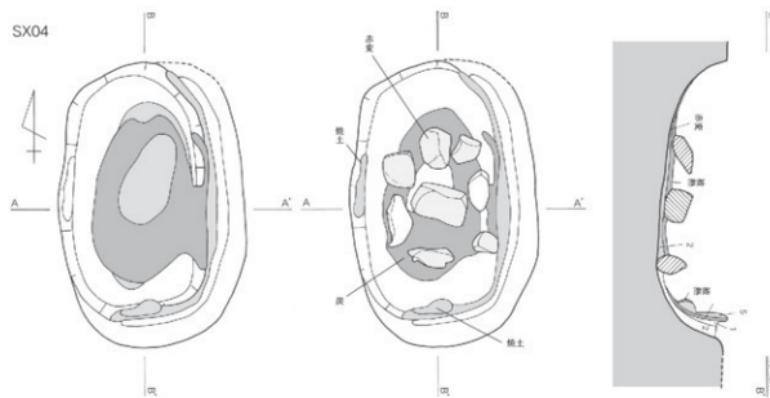
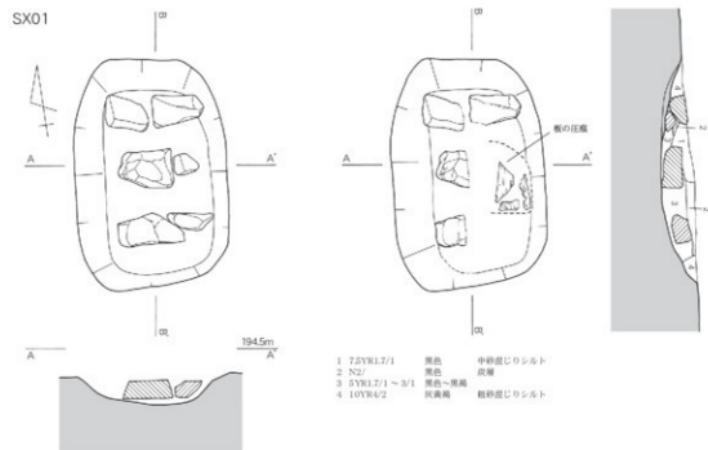
堂垣内遺跡 遺構全体図



堂塙内遺跡 遺構平面詳細図

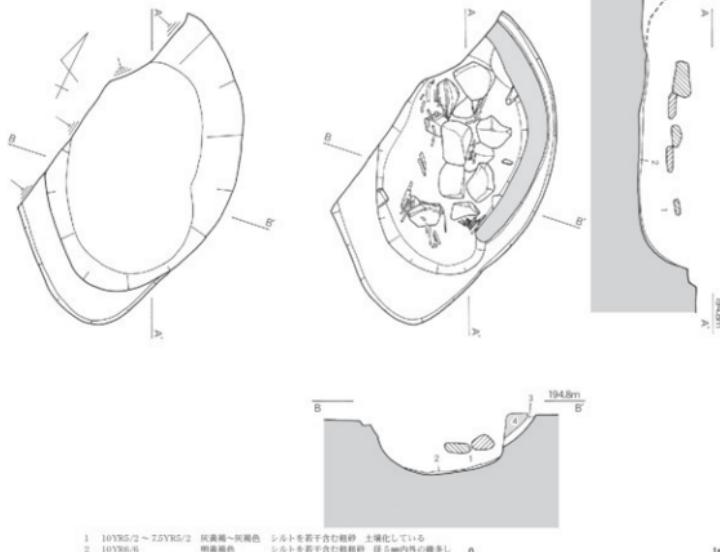


### 堂垣内遺跡 トレンチ 1・2 土層断面図

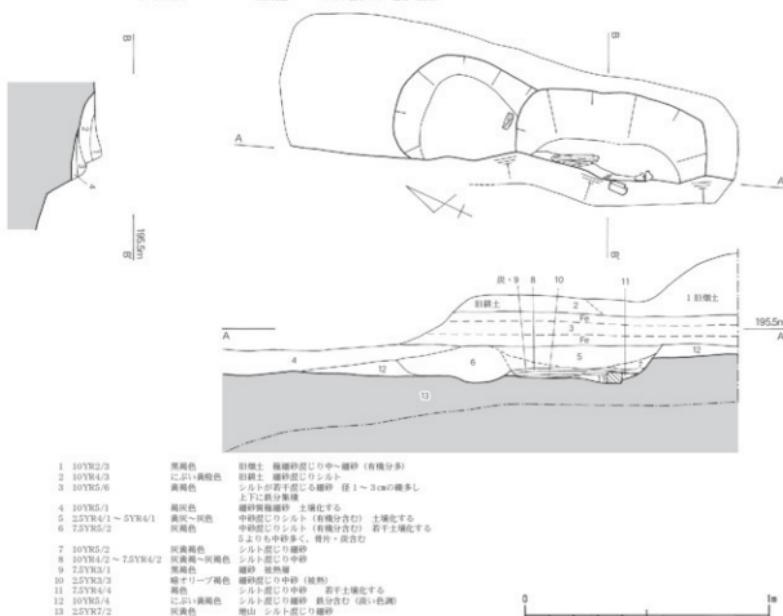


堂垣内遺跡 遺構 I

SX03

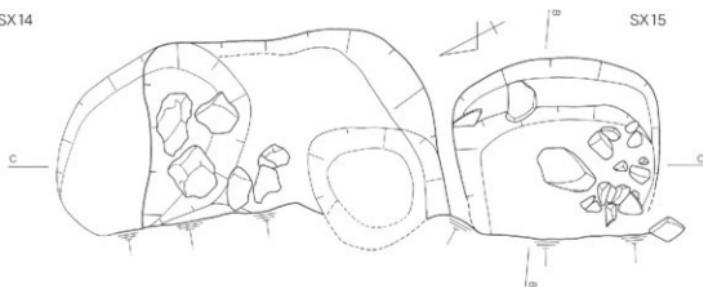


SX05

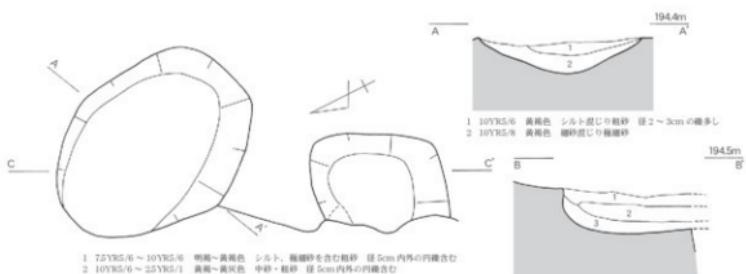


堂垣内遺跡 遺構Ⅱ

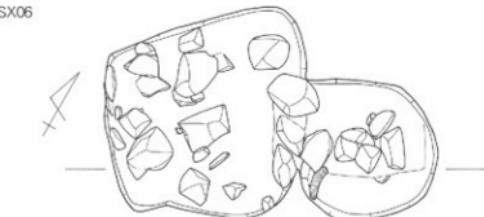
SX14



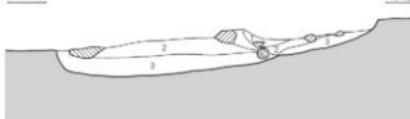
SX15



SX06

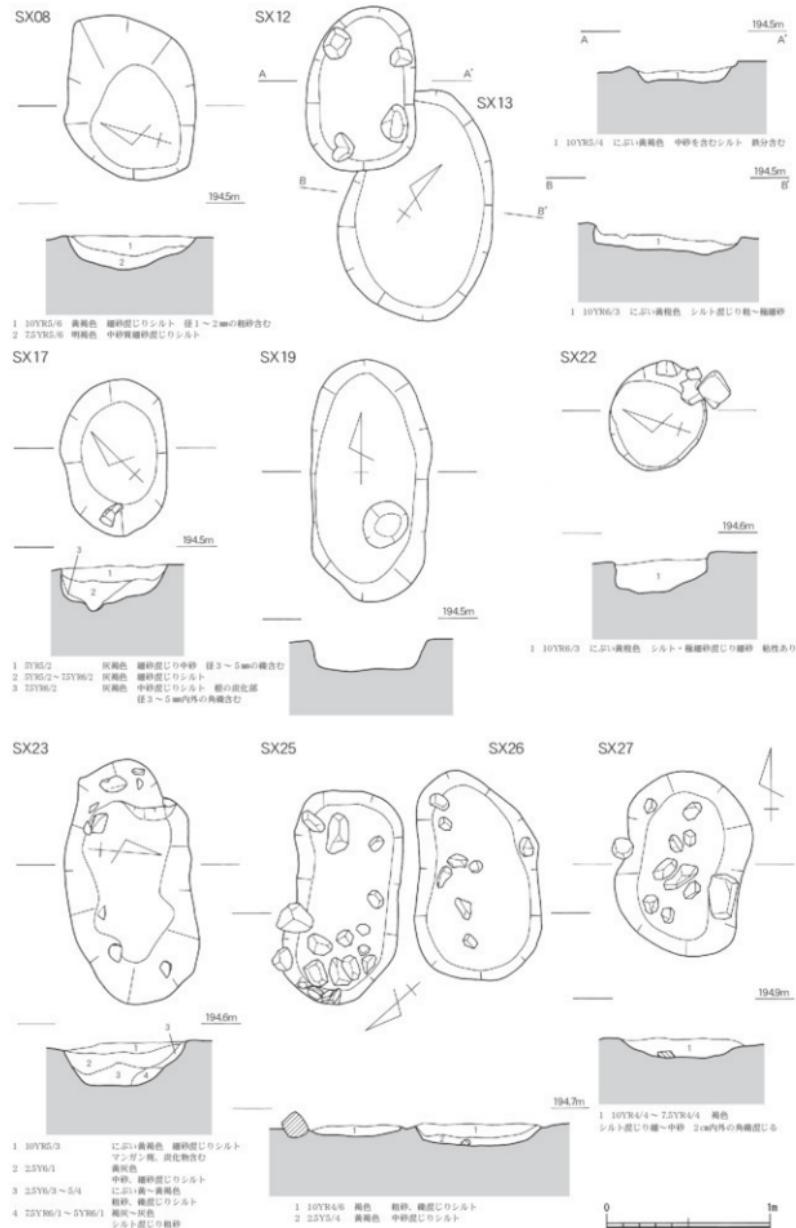


194.5m

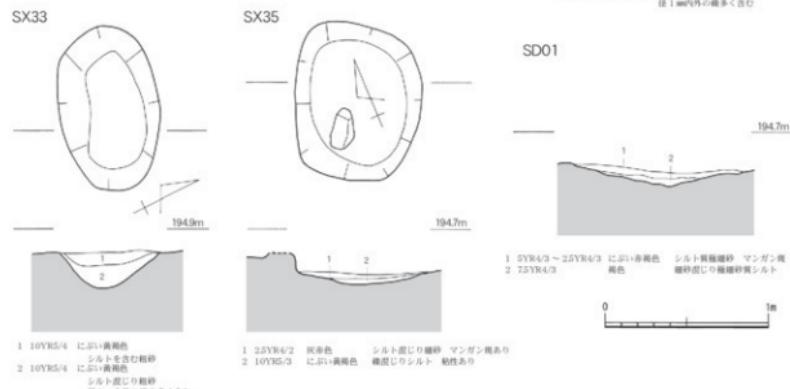
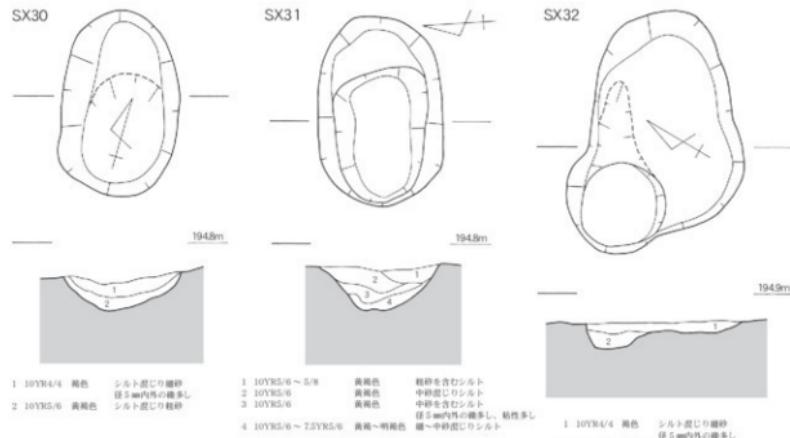


- 1 10YR4/2 黄褐色 シルト・細繊維を若干含む中～粗砂  
2 10YR6/4 ~ 6/6 に近い黄褐色～明黄色 シルト混じり中砂 粒分含む 若干土塊化  
3 25YR/1 黄褐色 中砂含むシルト マンガン塊あり 若干土塊化





堂垣内遺跡 遺構IV



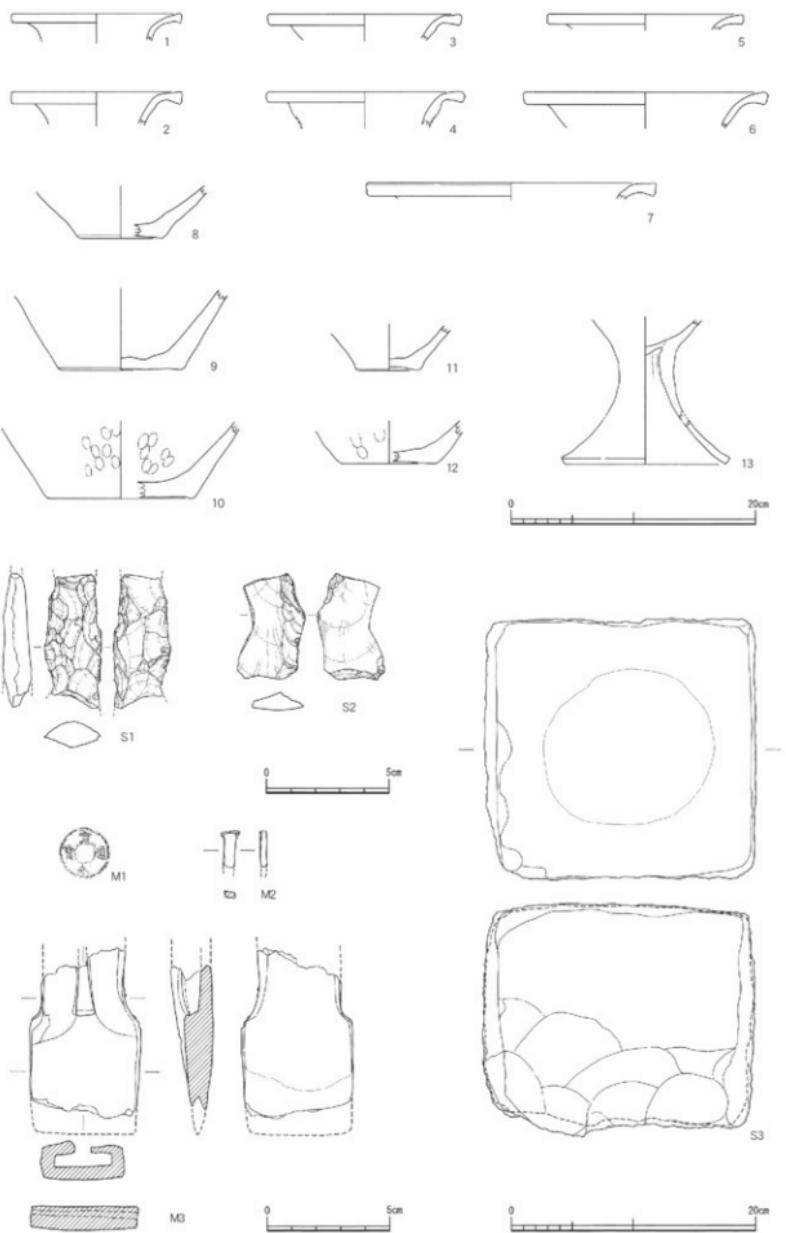
### 上段 東西 セクション北壁面 (東半)



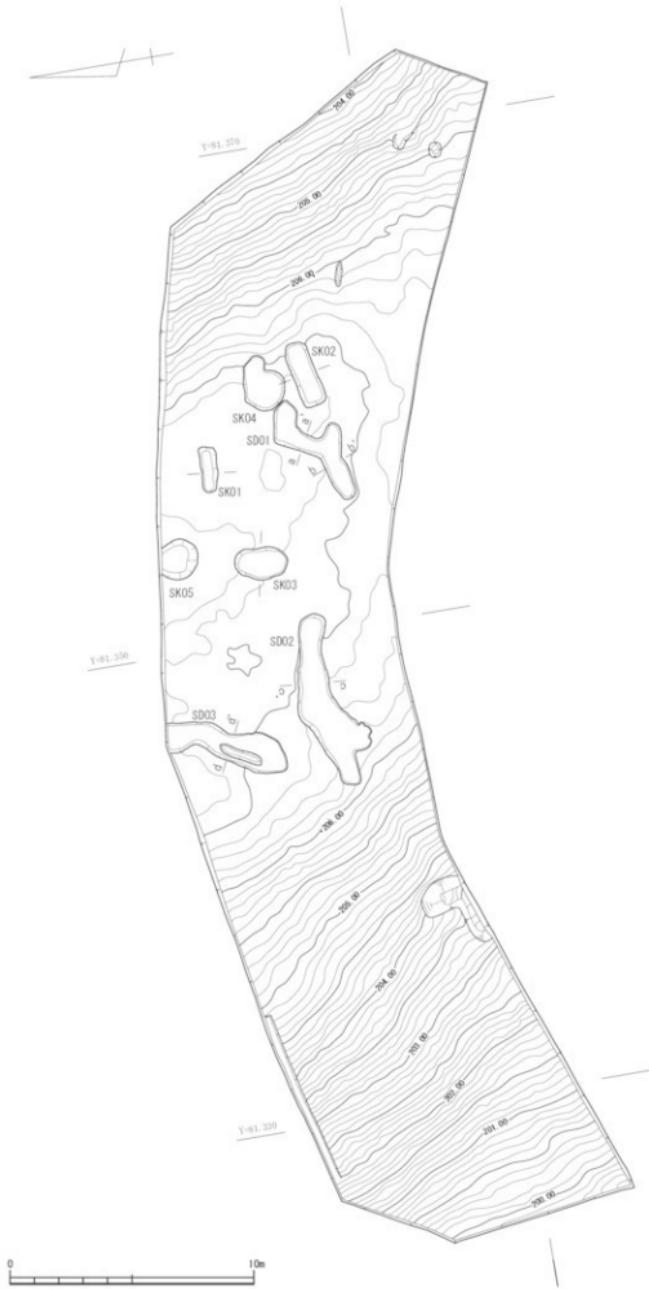
### 上段 東西 セクション北壁面 (西半)



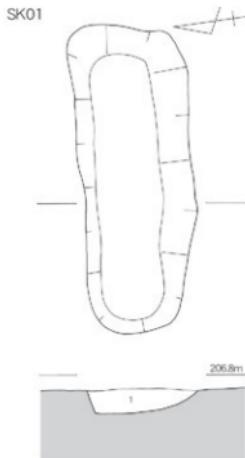
- |                   |              |  |
|-------------------|--------------|--|
| 1 10YR4/7 ~ 5/2   | 灰褐色          | シルト混じり粗砂頁岩<br>頁岩多し (SD01 種土)               |
| 1 5YR ~ 2.5YR4/2  | 灰褐色          | 粗砂頁岩<br>頁岩多し (SD01 種土)                     |
| 2 10YR4/2 ~ 5/2   | 灰褐色          | シルト混じり粗砂<br>径 1 ~ 2 cm の礁多し                |
| 2 7.5YR5/2 ~ 4/2  | 灰褐色          | 粗砂頁岩+シルト<br>径 1 ~ 2 cm の礁<br>礁多し (SD01 種土) |
| 3 2.5YR4/4 ~ 5/4  | に赤い黄褐色       | シルト混じり粗砂<br>SD01 種土                        |
| 4 10YR ~ 2.5YR4/3 | に赤い黄褐色へに赤い黄色 | シルト混じり粗砂<br>SD01 種土                        |
| 4 10YR ~ 2.5YR4/3 | 灰褐色          | シルト混じり粗砂<br>SD01 種土                        |
| 5 2.5YR4/4        | 灰褐色          | シルト混じり粗砂<br>SD01 種土                        |
| 6 2.5YR4/2        | 灰褐色          | シルト混じり粗砂<br>SD01 種土                        |
| 7 2.5YR5/2        | 明褐色          | シルト混じり粗砂<br>SD01 種土                        |



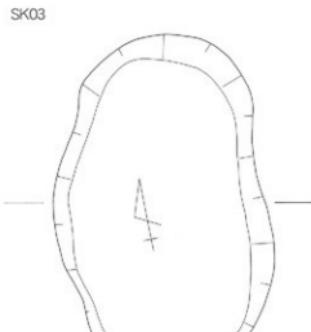
堂垣内遺跡 遺物



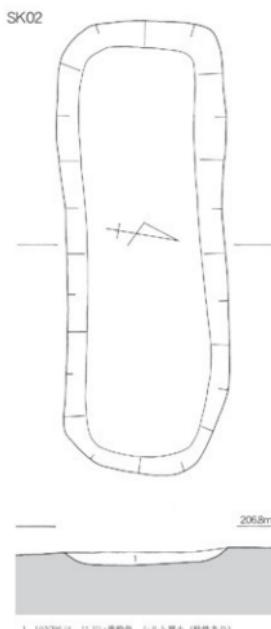
小坂遺跡 遺構全体図



1 25YR5/2 岩赤色 シルト質土(粘性あり)



1 7.5YR4/1 岩灰色 シルト(粘性あり)

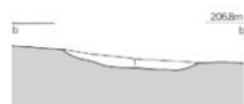


1 10YR8/4 棕褐色 シルト質土(粘性あり)

SD01 東側断面 (西壁)

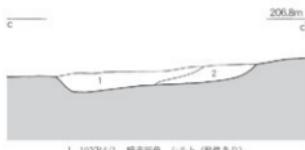


SD01 西側断面 (西壁)

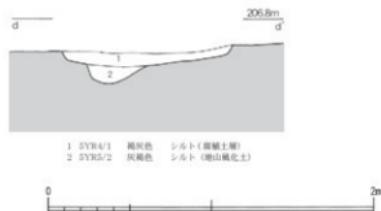


1 5YR4/1 岩灰色 シルト質土(粘性あり)

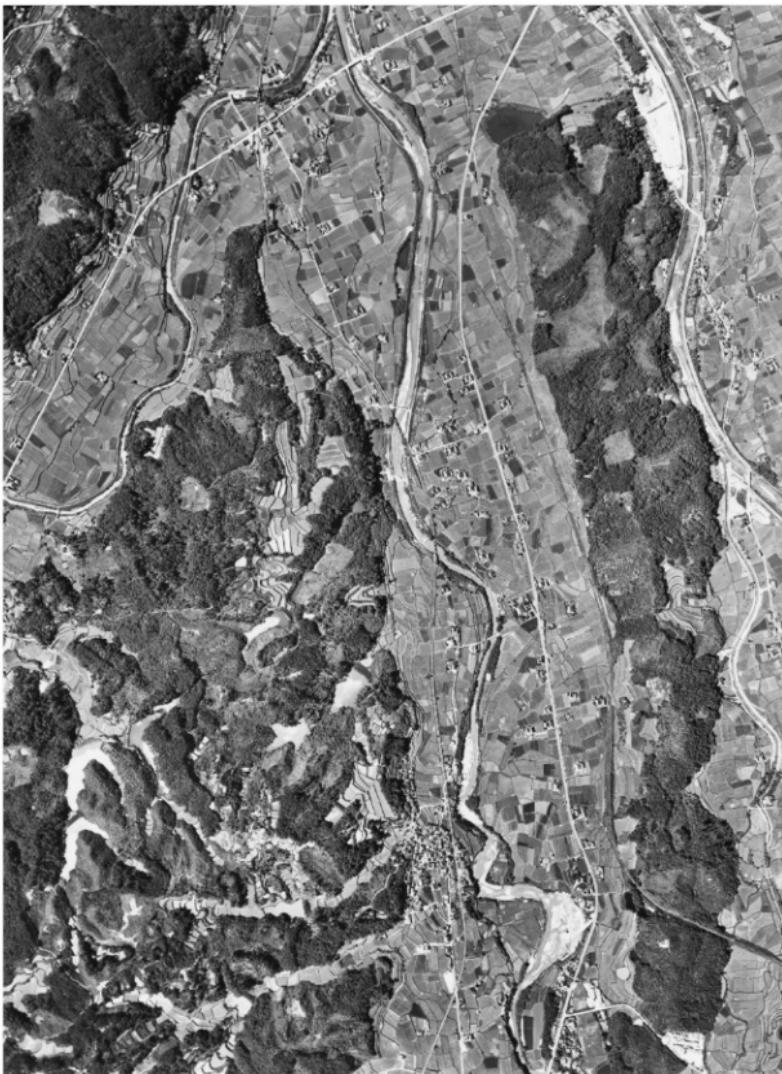
SD02 東壁

1 10YR4/1 棕褐色 シルト(粘性あり)  
2 5YR7/1 棕褐色 シルト(粘性あり)  
地山の砂土

SD03 南壁

1 5YR4/1 岩灰色 シルト(腐植土層)  
2 5YR5/2 灰褐色 シルト(地山風化土)

0 2m



航空写真（国土地理院）

写真図版 2

堂垣内遺跡 空中写真 1



堂垣内遺跡 遺跡全景



調査地点 遠景（北東から）



調査地点 遠景（南東から）

写真図版 4

堂垣内遺跡 空中写真Ⅲ



調査地点 遠景（北から）



調査区 全景（東から）



堂壇内遺跡 調査前状況



トレンチ 1



トレンチ 2



トレンチ 3



トレンチ 1 東壁



火葬址 SX01・トレンチ 2 西壁



トレンチ 3 東壁

写真図版 6

本発掘調査 全景



調査区全景（北東から）



遺構の状況（東から）



遺構の状況 近接



火葬址 SX01・SX04 (南から)



火葬址 SX01 炭被覆状況 (北から)



SX01 炭堆積状況 (東から)



同 完掘状況 (南から)



火葬址 SX04 埋積状況



同 標石の状況



SX04 完掘状況 (南から)

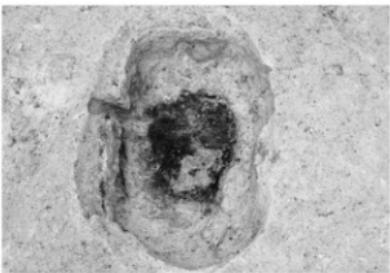


同 全景 (西から)

遺構 II



SX04 棺台の状況



同 下層の炭層



火葬址 SX03 火葬骨出土状況



同 (東から)



同 完掘状況 (東から)



火葬址 SX05 火葬骨・炭化物出土状況



同 完掘状況 (東から)



土坑 SX14・15 (北から)



SX14 (北から)



SX15 (北から)



SX06 (南東から)



同 集石・炭化物



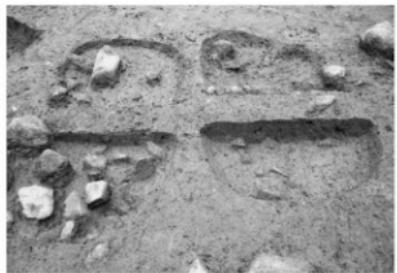
SX08 (北東から)



SX12 (南から)

写真図版 10

遺構IV



SX25・26 (北西から)



SX30 (北から)



SX31 (西から)



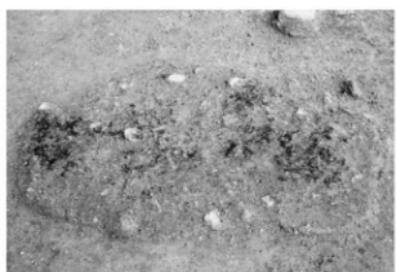
SX32 (南から)



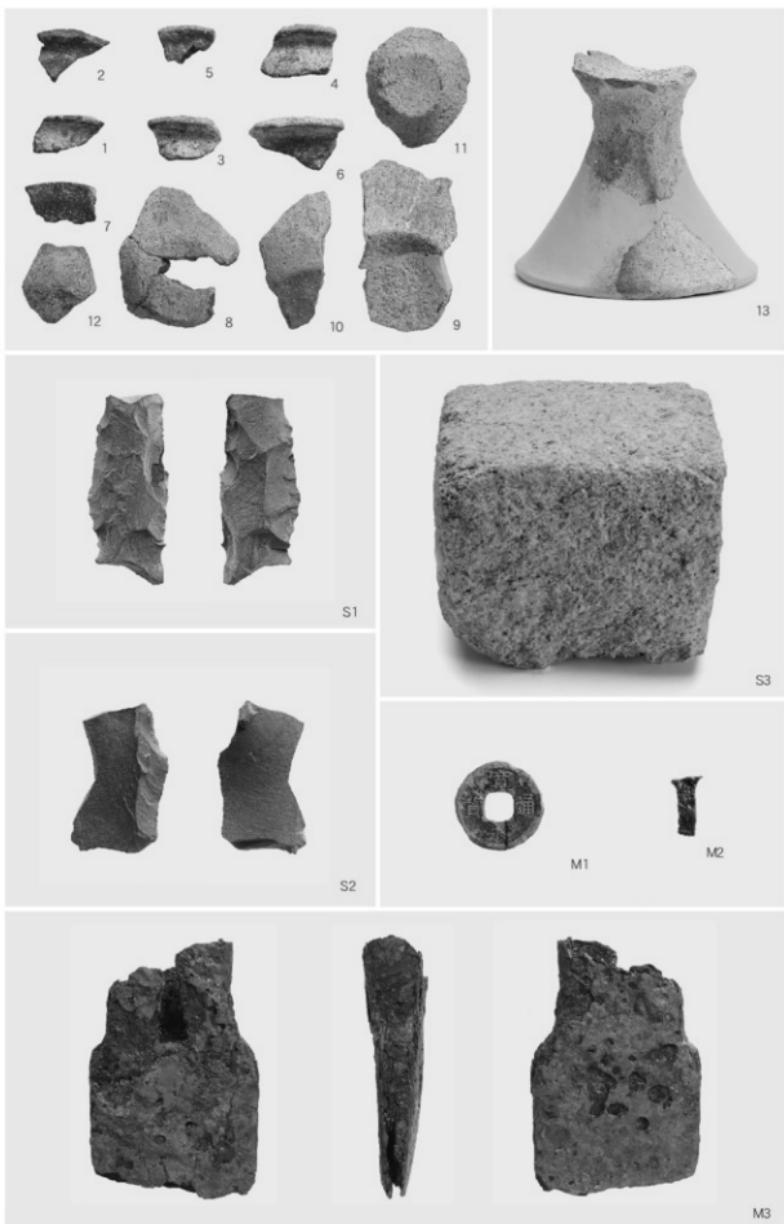
SK35・SD01 (南から)



SR01 断面 (北から)



炭化物集中部



堂塙内遺跡出土遺物



小坂遺跡 調査地点近景（西から）



トレンチ1 全景（西から）



トレンチ2 全景（南東から）



トレンチ2 堆積状況（北東から）



トレンチ3 全景（北から）



人力掘削状況

小坂遺跡 空中写真



小坂遺跡 遠景（南から）



調査区全景（真上から）

## 写真図版 14

小坂遺跡 遺構・遺物



小坂遺跡 全景（東から）



調査区近景（西から）



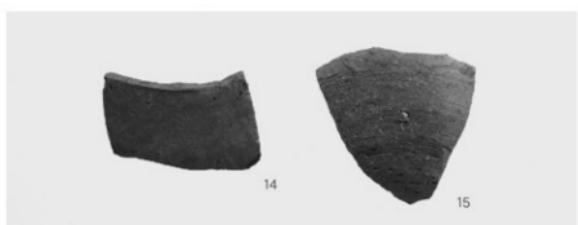
SK01（南から）



SK02（東から）



SD06（東から）



14

15

小坂遺跡 出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

---

兵庫県文化財調査報告 第470冊

神戸市

## 堂垣内遺跡・小坂遺跡

新名神高速道路箕面～神戸間(兵庫県域)建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26（2014）年3月10日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内)

TEL 079-437-5561

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社 ソーエイ

〒673-0898 兵庫県明石市樽屋町6-6

---